

TOSHIRO HATA PRESENTS

波多利朗の

Funky Corner

文・撮影●波多 利朗 text and photo by Hata Toshiro

(URL) <http://www.funkygoods.com/>(E-Mail) catty@mxp.mesh.ne.jpAgendAとマイクロライター・
キーボードのお話し

🔗 キーボードあれこれ

今回の本編は、入力デバイス（キーボード）に深く関係している。そこで前フリでは、いつもより多少長いスペースを割いて、筆者がこれまで収集してきた変形（変態？）キーボードを取り上げてみよう。

筆者は商売柄、キーボードには大変な拘りを持ってきた。筆者のタッチタイプのスピードは、通常よりもかなり速いほうであると自覚しているが、これはあくまで自分の好みに合ったキーボードを使用している時でのこと。多くの人がそうであるように、合わないキーボードを前にすると、入力スピードも低下するし、何よりも文章が浮かばない。とりわけ、一般的なノートパソコンのキーボードはひどい。あのペニャペニャなキータッチで文字入力をしていると、余りの情けなさに思わず遺言でも打ち込んでしまいたくなる。そんな中、ノートパソコンのくせに猛烈に品質の高いキーボードを搭載したモデルが、過去に存在した。かなり昔の製品であるが、HPが発売していたOmniBook 600Cである。このサブノートに搭載されていたキーボードは、そのまま切り出してデスクトップ用キーボードとして発売しても大受けしただろうと思うほど、それは良くできたものだった。

さて、筆者が常日頃使用しているデスクトップのメインマシンでは、DATALUXのDesk Keyboardを用いている。このキーボードを使い始めてからもう10年近くが経

過するが、今ではすっかり体の一部と化しているほど、慣れ親しんでしまった。このキーボードは非常に小型であり、しかもキーのストロークが深くしっかりとタイプできるので、高速のテキスト入力にはもってこいの製品である。現在でも、アメリカのDATALUXより購入することが可能だ（写真A、B）。

DATALUX Desk Keyboardの紹介ページ

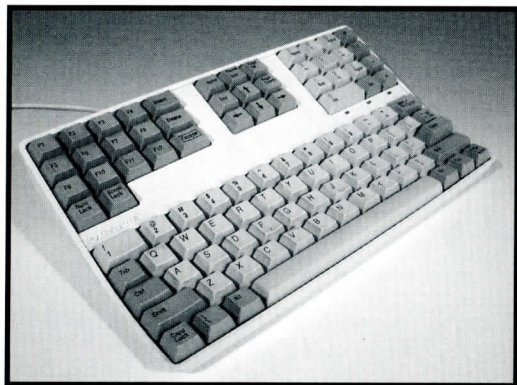
<http://www.datalux.com/keyboards/desk.asp>

ところで、1995年頃の話だが、エルゴノミック・キーボードが随分と話題に上ったことがあった。中でも、そのデザインの秀逸さで話題となった製品が、アメリカのKinesis Corporationが発売するERGONOMIC Keyboardであった。筆者はこの製品を1994年5月に某雑誌上で紹介したが、その後秋葉原の専門店でも取り扱うようになり、日本でのユーザもかなり多いものと思われる。この製品も現在入手可能だ（写真C）。

Kinesis CorporationのHP

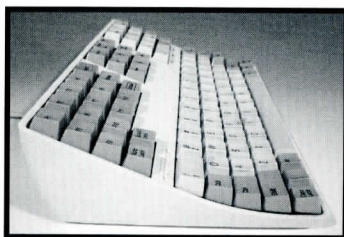
<http://www.kinesis-ergo.com/>

外観を見ていただければおわかりになると思うが、かなり癖の強い格好をしている。キー配置は通常のQWERTY配列であるものの、左右のキーが完全に分離し、かつ独立した窪みに収まっている。高速タイプには



DATALEXのDesk Keyboard 外観

これが筆者が常用しているDATALEXのDesk Keyboard。省スペースでキーストロークも深く、高速タイピングが可能

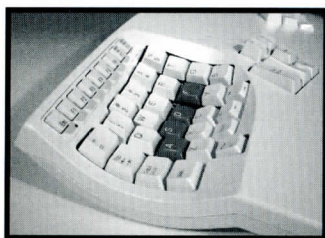
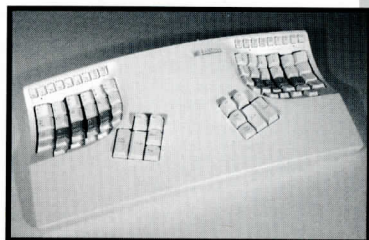


DATALEXのDesk Keyboard 側面

Desk Keyboardの特徴が、この奥に向かって迫り上がっている側面。キーボードにちょうど良い傾斜が付き、文字を打ち込みやすい

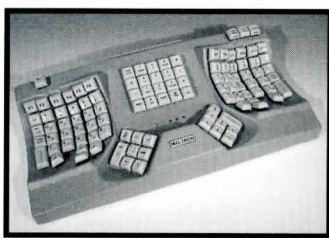
Kinesis CorporationのERGONOMIC Keyboard

エルゴノミック・キーボードの最高峰、KinesisのERGONOMIC Keyboard。造りの良さは抜群で、ディスプレイしたくなるような形状は、まるで美術品のようだ



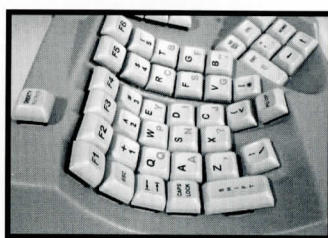
ERGONOMIC Keyboardのキー部分のアップ

左右の窪みの中に湾曲して配置されるキートップ。見るからに異様な外観だ。独特の曲線を持つ本体は、ヴォリューム感いっぱいのデザインである



MALTRON Keyboardの外観

Kinesisよりも異様に見えるのが、このMALTRON Keyboard。本体はびっくりするくらい軽くできている



MALTRON Keyboardのキー部分のアップ

この湾曲しまくったキー配置を見よ！ キートップには2つの文字が併記されているが、一方はQWERTY、もう一方はMALTRON配列のもの。各配列は切り替えて使用することが可能

かなりの熟練を要するが、逆に慣れてしまうと手放せなくなるようだ。現に、変人Psion使いとして有名な柴隠上人 稀瑠冥閻守 (Kerberos) 氏は、このキーボードを「常用」している。この妙ちきりんな格好のキーボードに向かって猛烈な速さでタイピングしている氏を見ると、まるで宇宙人のようである (写真D)。

このKinesis Keyboardと良く似たデザインの製品で、MALTRON Keyboardという製品もあった。こちらは極めてマイナーな製品であるため、実物をご覧になった方は少ないと思われるが、Kinesis Keyboardをもう少し安っぽくしたような製品である。キーボード中央にはテンキーが配置されており、キーの数が多分、Kinesis Keyboardよりも異様に見えるのがミソだ。このキーボードは、QWERTY配列の他にもMALTRON配列なるものも切り替えて使用できるのが特徴である。MALTRONは、片手だけで入力できるキーボードや障害を持った方専用のキーボード等、福祉関連製品にも力を入れている会社である。現在でも入手可能であるが、どの製品も非常に

高価である (写真E、F)。

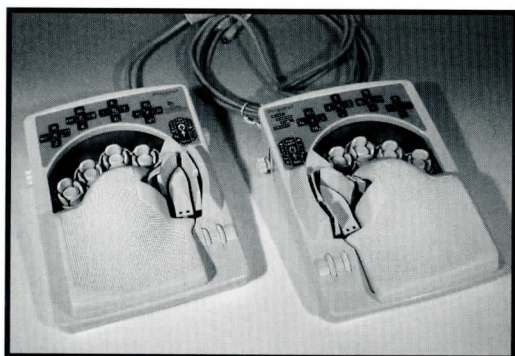
MALTRON LTD.のHP

<http://www.maltron.com/>

外観の奇抜さで群を抜いていた製品といえば、何と云っても DATAHAND SYSTEMが発売した Datahand Keyboardの右に出るものは無いであろう。筆者はかつて、この製品の紹介記事を書いたことがある。何を隠そう、あのカルトPC雑誌、PC WAVEの1999年5月号に掲載される予定であったのだ！ しかし、同誌はその前号で突然廃刊となり、この記事は世に出ることはなかった (ちなみに筆者のHP上で幻の記事原稿として掲載しているので、お暇な方はごらんになっていただきたい)。

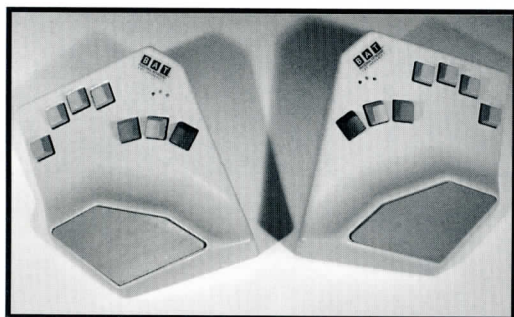
波多利朗のFunky Goods 幻の最終回

http://www.funkygoods.com/pcwave/1999_05/lastfunky.htm



DATAHAND SYSTEMのDatahand Keyboard

変体キーボードの極北、Datahand Keyboard。形状、操作性等、全てに渡って空前絶後の製品だ。指先のわずかな動きだけで、文字入力が可能。軽く10万円を超える製品なので、一回買えば一生お付き合いするくらいの覚悟が必要!



INFOGRIPのBAT Personal Keyboard

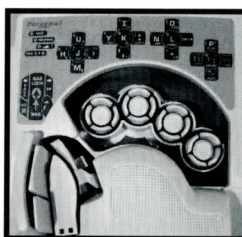
左手用、右手用の2種類が用意されており、各単独で使用可能。片手で全ての文字が入力できるコード・キーボードである

さて、このDatahand Keyboardであるが、QWERTY配列を踏襲しているものの、その格好は従来の製品とは一線を画すブツ飛んだものだ。いわゆるキートップというものは存在せず、各指の周りにあたかも花弁のように配置されたスイッチを指先でカチャカチャと操作することで、文字入力を行う仕組みになっている。こいつを高速で使いこなす様は、まるで映画「攻殻機動隊」のワンシーンそのものだ。この製品は現在でも入手可能である。詳細はDATAHANDのHPをご覧になっていただきたい。しかし、驚くほど価格が高いため、購入を検討された方は覚悟したほうが良い。10万円を軽く超す(写真G、H、I)。

Datahand Keyboard

<http://www.datahand.com/index.html>

以上ご紹介したキーボードは、いずれもQWERTYキー

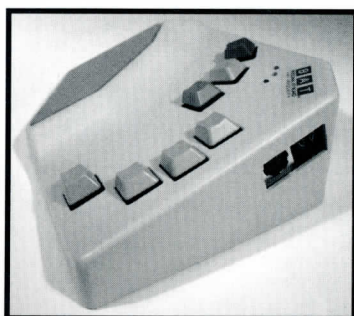
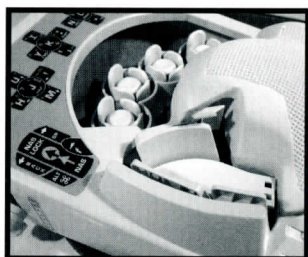


Datahand Keyboardのキー部分のアップ

右手用キーボードのアップ。花弁のように見える部分がスイッチとなっており、指先で上下左右に動かして文字入力を行う。上部には各動作に伴う入力文字が記されている

親指キー部分のアップ

Datahand Keyboardでは、親指に複数のファンクションが割り当てられているため、キー形状が極めて複雑である



BAT Personal Keyboardの複雑な外形

これは右手用キーボードのアップ。傾斜の付いた複雑な形をしている

ボードの一種と言えるものであるが、これとはまったく別のコンセプトで設計されたキーボードもあった。その一つがINFOGRIPが発売したBAT Personal Keyboardである。BAT Personal Keyboardは、片手だけで全てのコードが入力できるように設計された製品である。キーの数はメインが4個、ファンクションが3個の合計7個しかなく、これらのコンビネーションで英数字全ての入力を実現している。左手用と右手用の2種類が用意されており、文字入力には若干の慣れが必要となる(写真J、K)。

筆者はこのBAT Personal Keyboardを、1996年3月に秋葉原のT・Zoneの、確かジャンク品の投げ売りで購入した。価格は4,980円だったような記憶がある。輸入してみたものの、日本ではほとんど流行らなかったため投げ売りされていたのであろう。ちなみに現在でも販売されているようなので、ご興味のある方は下記HPにアクセスしてみたい。



001

Agendaの外観

一見普通のPDAのように見えるが、キーボードを取り巻くように配置された5つのキーパッドが特徴的



002

Agendaとその付属品

パラレル接続ケーブル (左上)、ACアダプタ (右上)、32KB拡張メモリカード (左下)、そして本体 (右下) の4点

INFOGRIP BAT Personal KeyboardのHP

http://www.infogrip.com/product_view.asp?RecordNumber=12

さて、BAT Keyboardのように複数のキーの組み合わせで文字入力を行う方法は、コード・キーボード (Chord Keyboard) と呼ばれている。そして、今回ご紹介するPDA、Agenda Microwriterには、このChord入力方式の元祖とも言えるものが搭載されているのだ。

若干前フリが長引いたが、これで漸く本編に入る準備が整った。それではAgenda Microwriterのお話しに入ることにしよう。

🔗 マイクロライター・キーボード

上述したように、今回ご紹介するAgendaというPDAには、マイクロライター・キーボード (Microwriter Keyboard) と呼ばれるコード入力装置を備えていることが最大の特徴となっている。Agendaを見ていただければすぐにお判りになると思うが、アルファベット順に並んだ通常のキーボードの他に、5個の四角いパッドが配置されている。パッドの位置は、右手を端末上に置いた時に、各指先が当たる場所となっている。そう、この端末は、コード・キーボード (Chord Keyboards) という、特殊な入力方法を備えた、極めてユニークな製品だったのだ (001、002)。

例えば、このAgendaをボイジャー2号あたりに搭載して宇宙空間に放ち、何千年後か何万年後か分からないが、どこかの星の宇宙人が、たまたまそれを見つけたとしよう。ある程度の知的生命体であれば、きっとこの端末を作った星、すなわち我々地球人の手の大きさを知ることができるというものだ、なんて想像を巡らすのは楽しいもんだね。

さて、このAgendaであるが、あのPsionと同様イギリス製のPDAである。発売されたのは1989年で、実に15年も前の製品である。本格的なPDAとしては、最初の製品と言えるものだ。ちなみに当時の価格は199ポンドであったそうだ。いずれにせよ、このような先進的かつユニークな入力装置を搭載した端末が、今から15年近くも前に発売されていたということは、大変な驚きである。しかし、Agendaに搭載されたマイクロライター・キーボードは、実は1980年に「The Microwriter」というインプットデバイスに搭載されていたのだ。そこで、先ず最初にAgendaの先祖とも言える「The Microwriter」から入ってみることにする。



🔗 The Microwriter

Agendaに搭載されているマイクロライター・キーボード (Microwriter Keyboard) は、サイ・エンドフィールド (Cy Endfield) の発明である。このサイ・エンドフィールドなる人物だが、ビジネスマンであり科学者でありマジシャンであり、そして映画監督でもあるという、マルチタレントであった。本筋からは外れるが、どのような映画を撮影していたかをWeb上で調べてみると、「異常な快楽 (1969年)」、「カラハリ砂漠 (1965年)」、「ズール戦争 (1964年)」、「地獄特急 (1957年)」などといったタイトルが出てきた。

このエンドフィールドであるが、1980年に「The Microwriter」という端末を500ポンドで商品化する。これはオーガナイザではなく、片手だけでテキストを入力するためのインプットデバイスであった。このThe Microwriterであるが、8Kバイトの不揮発性メモリ (RAM)、1行16キャラクタ表示のLCDディスプレイ、RS232Cコミュニケーションポート、バスコネクタ、カセットテープ/IF



003

The Microwriterの外観
 画像提供：John Honniball氏
 URL：<http://www.gifford.co.uk/~coredump/org.htm>

を有した端末で、内部にNi-Cdバッテリーを搭載し30時間の駆動が可能であったようだ。入力方法は極めてユニークで、5個のキーボード+ファンクションキーを搭載しており、片手だけでアルファベットを入力することが可能であった。これが、後にAgendaAに搭載されるマイクロライター・キーボード (Microwriter Keyboard) の原型となる (003)。

このThe Microwriterであるが、発案者のサイ・エンドフィールドにより特許出願がなされており、Web上でも閲覧することができる。特許のタイトルは「US4360892: Portable word-processor」であり、出願は1982年11月23日となっている。以下に掲載されている特許の閲覧ページを示したので、参考していただきたい。

**US4360892: Portable word-processor
 特許情報**

<http://www.delphion.com/details?pn10=US04360892>

The Microwriterは、外形もユニークだ。本体上に右の手のひらを乗せると、ちょうど指先が5個のパッドの位置にくるようになっていて、LCD表示部分は本体上部に設けられていた。ちなみに、The MicrowriterにはRCA製1802 CPUが用いられていたようだ。このCPUは8ビットの汎用CPUとしては最初のC-MOS製品であり、そのレジスタ構成と命令体系がRISCアーキテクチャに似ていたところから、最初のRISCプロセッサとも呼ばれている。多少トリビア的になるが、1802 CPUの一種には、Silicon



004

AgendaAのMicrowriter Keyboard
 Microwriterのキーボードは、通常のキーの周囲を取り囲むようにして配置されている

On Sapphire (SOS) テクノロジーを用いた製品があった。これらは、そのプロセス上の特徴から放射線や静電気に強く、ボイジャーやパイオニアといった宇宙探査機のCPUとして使用されたようだ。まさに「へえ〜〜〜！」ってな感じである。

さて、The Microwriterは、初期バージョンが1980年に発売された後、改良版が1982年にリリースされている。初期バージョンのレビュー記事は、1980年のPersonal Computer World magazine誌に掲載されていた。このMicrowriterに拘りを持つ人は多いようで、Webを見ると現在でもまだ現役で使っているという紹介も掲載されていた。どうやら、Windowsマシンとシリアルケーブルで接続し、Windowsのターミナル上にMicrowriterからテキスト入力を行っているようである。廃人恐るべし！ 使えるものは何でも使う！ 実に立派な心がけだと言えるであろう。

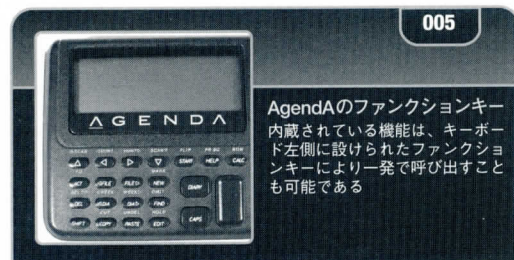
**The Microwriterを紹介したページ
 John Honniball氏制作の「Old Organisers」**

<http://www.gifford.co.uk/~coredump/org.htm>

AgendaAの概要

閑話休題。

今回ご紹介するAgendaAは、このThe Microwriterに使用されたキーボードを搭載し、1989年に発売された。メ



005

AgendaAのファンクションキー
 内蔵されている機能は、キーボード左側に設けられたファンクションキーにより一発で呼び出すことも可能である



006

AgendaAの液晶画面
 起動時に表示されるスタートメニューの画面

インとなるプロセッサはモトローラ製6303で、これは前号でもご紹介したPsion Organiserシリーズに搭載されていたものと同じである。内蔵メモリは標準でRAM 32KB、ROM 32KBを搭載しており、RAMは最大128KBまで拡張することができた。インプットデバイスとしては、マイクロライター・キーボードの他にも、一般的なアルファベットキーも搭載されている。キー配列はQWERTYではなく、アルファベット順に7×4行のマトリックス状に配置されたものだ。英字キーの上部にはテンキーが搭載されている。また本体左側には、カーソル移動キー等の各種ファンクションキーが配置されている (004、005)。

マイクロライター・キーボードのパッドは、アルファベットキーを取り囲むようにして配置されており、右手のひらを乗せるとちょうど指先がフィットするようになっている。親指に相当するキーパッドは他のキーよりも若干大きめとなっており、隣接してファンクションキーである「DIARY」キーと「CAPS」キーが配置されている。キーパッドは上下左右にグニョグニョと動くゴムのようなタッチとなっている。一見、こんなんでも本当に文字入力ができるのかどうか、不思議に感じてしまうような製品だ。

液晶ディスプレイは20キャラクタ×4行の液晶表示であり、PDAとしてはそれほど大きくはない。電源は本体内部にNi-Cd充電電池を搭載しており、ACアダプタで充電して用いる。Web上には本体を分解した写真を掲載しているサイトもあり、そこを見ると直径3cmほどの大きなボタン型電池が5個、直列に実装されている。電圧は1.5V×5=7.5V仕様となっている (006)。

I/O端子は本体右側面のスライドカバー内に搭載しており、12個の接点を持つ特殊仕様のコネクタとなっている。付属品として、PCと接続するためのシリアルケーブルと、プリンタに接続するためのパラレルケーブルが用意されていた。今回入手したAgendaAには、パラレルケーブルのみ付属していた (007、008)。

本体裏面には拡張カードを挿入するためのスロットが2つ、設けられている。いずれも特殊仕様のもので、Aスロット、Bスロットという名称が付けられている。スロットカバーを外すと、内部に8個の接点が見える。このスロットにはオプションの拡張メモリやプログラムを取めたROMを搭載できた (009)。


今回、付属品として32KBの拡張SRAMカードが付いてきたので、その内部を見てみよう。カード内部には以下のデバイスが搭載されている。データ保持用のボタン電池は、取り替え可能になっている (010、011)。

007



AgendaA側面に設けられたI/Oコネクタ
AgendaA右側面には、12接点の特殊仕様コネクタが設けられている。通常はスライド式カバーで覆われている。その横には、ACアダプタのコネクタ入力端子、チャージ確認LED、電源スイッチが並ぶ

008



付属してきたパラレル/Fケーブル
AgendaAとプリンタとを接続するためのパラレル/Fケーブル。AgendaA側は特殊仕様コネクタとなっている

009



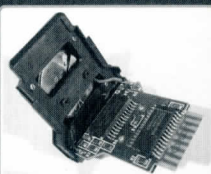
本体裏面に設けられた拡張スロット
写真はスロットカバーを外したところ。手前側がA、奥がBスロットとなっている。拡張スロットの接点は8個

010



32KBの拡張SRAMカードの外観
AgendaA専用のカードで、他機種との互換性はない

011



32KBの拡張SRAMカードの内部構造
SRAMチップと制御回路、及びデータ保持用のボタン電池が格納されている

- ・日立 HM62256LFP-10T (32K×8bit SRAM 1990年製造品)
- ・フィリップス PCF1500T/012
- ・CR2032 ボタン電池

本体内部の充電電池は、専用のACアダプタを用いて充

電する。このACアダプタであるが、イギリス仕様のものが付いてきた。当然、コンセント形状もAC電圧も異なるため、日本では用いることができない。アダプタそのものは12V DC出力の一般的なものなので、ジャンク屋かなんかで適当なACアダプタを購入してきて、プラグを付け替えれば代用できると、当初は気軽に考えていた。

さて、アダプタ本体を秋葉原の秋月電子通商で購入してきたまでは良かったのだが、プラグの入手にてこずってしまった。プラグ形状が細すぎるのである。本体に付属してきたオリジナルACアダプタの先を切って使えば良いのだが、コレクションとして残しておきたいので、それもままならない。秋葉原の主だった電子部品屋を回り、ようやくガード下の某店舗で適合するACアダプタプラグを発見した。プラグ外径φ3.0mm、内径φ1.1mmという極細タイプである。店主曰く、この形状のプラグは日本国内では流通しておらず、海外のPDA製品で良く使われているものだそうだ。「秋葉原で扱っているのはウチくらいじゃないですかあ？」とおっしゃっていた。海外の古い製品になると、ACアダプタのプラグ一つ探すのにも苦労するものだ……。

マイクロライターに代表されるコード・キーボードでは、5個のメインとなる入力パッドと、2個のファンクションパッドの、総計7個の入力パッドで構成されている。しかも右手のみで全ての文字が入力できる。キーの個数が少ないことにより、端末の小型化も容易になるといったメリットもある。強力な処理能力を持つCPUを搭載した現在のPDAでは、手書き入力によりこうした問題を難なく解決してしまうのだが、当時の貧弱なハードウェア・リソースでは、手書き入力は実用的ではなかった。こうした時代に、コード・キーボードのような多大なCPUパワーを必要としない入力方法は、極めて合理的な手段であったのだ。

実際のキー入力方法だが、図1を参照していただきたい。この図では、アルファベットの一例として、A、B、C、D、N、H、P、Zの入力方法を記述してある。図中、5つの丸い部分は、メインとなる5個のキーパッドを表し、左下より順に親指、人差し指、中指、薬指、小指を置くようになっている。これら5つのキーの押し方により、文字を区別するのであるが、規則性がまったく無いと覚えるのも大変だ。そこで、ある程度文字の外形から押すキーがわかるよう、工夫されている。

「A」の文字では、大文字のAの左の斜線をイメージしてボタンを押す。「B」の文字では、小文字の「b」の右側カーブを描くようにボタンを押す。以下、各文字に対応したパッドの押し方が、予め決められている。これを一通り覚えてしまえば、短時間でそれぞれ高速に文字入力ができるというわけだ。

図2にアルファベットとスペース及びリターンキーの入力方法を示した。一見、入力する文字の外形と押すパッド

マイクロライター・キーボードによる入力方法

Agendaの機能詳細については後ほど触れることとし、先ず最初にマイクロライター・キーボードの使用方法について述べてみよう。

マイクロライター・キーボードは上述したようにコード・キーボード (Chord Keyboards) と呼ばれている。通常のQWERTYキーボードは、それぞれの文字に対応したキーが設けられているが、このコード・キーボードでは、少数のキー・パッドのみを使用し、入力したい文字の形に応じて複数キーを同時に押すことで、文字入力を行う。これもトリビア的知識として有名であるが、現在一般的に用いられているQWERTY配列のキーボードは、その昔、メカニカル方式のタイプライターを使用していた時代に、余りに速くキーを操作するとメカの動作が付いて行けないことを解消するため、わざと打ちにくくなるようキーを配置したものであった。そんな生い立ちがあるから、打ち込みが難しいのも理である。なおかつ、各アルファベットごとにキーが設けられているため、キーの数も多く、高速に入力するためには、両手の指を総動員してタイピングを行わなくてはならない。

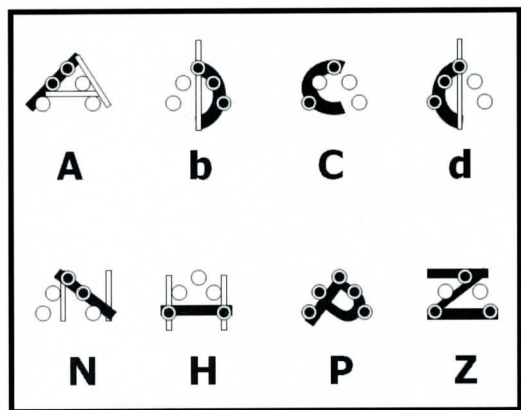


図1 アルファベットの入力例

Microwriter Keyboardでは、入力するアルファベットの形状から押すキーがある程度判るようにキーが割り当てられている。一例として、A、B、C、D、N、H、P、Zの各文字の入力方法を示した



Micro writer コード表 (アルファベット)

A	B	C	D	E	F
G	H	I	J	K	L
M	N	O	P	Q	R
S	T	U	V	W	X
Y	Z	Space	Enter		

図2 アルファベットの入力方法
黒塗りの四角が押すキーを表す

ドとの対応関係がわかりにくいものもあるが、そこには若干のこじつけが入っている。その他の文字の外形と入力時に押すパッドとの関係は、下記のWebページに掲載されているので、ご参考にしていただきたい。

THE CYKEY

<http://www.bellaire.demon.co.uk/newcykey.htm>

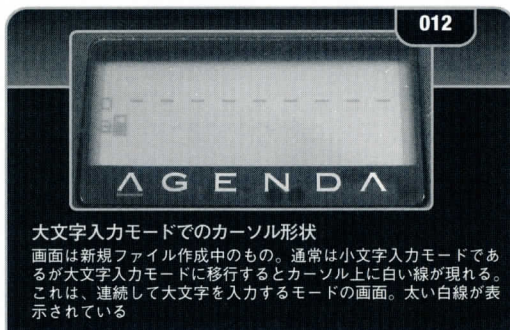
さて、マイクロライター・キーボードには、入力する文字や記号に応じて以下の3つのモードが用意されている。

- ・ノーマルモード : 小文字の英字を入力するモード
- ・大文字入力モード : 大文字の英字を入力するモード
- ・記号入力モード : \$や#といった記号を入力するモード

AgendaAでのマイクロライター・キーボードは、デフォルトでは小文字入力モードとなっている。大文字や記号を入力する場合には、親指のキーパッド横に設けられた「DIARY」と「CAPS」の2つのファンクションキーを操作し、大文字モードに移行する。

大文字モードへの移行は、親指パッドの横にある「CAPS」キーを一回親指で押した後、文字を入力すればよい。小文字入力モードでは、カーソルは黒い四角「■」となっているが、CAPSキーを一度押すとカーソル上部に白い線が現れる。これが、大文字入力モードに入ったという印になる。この状態で文字入力を行うと、1文字のみ大文字で入力され、後は小文字モードに戻ってしまう。

ずっと大文字入力が続けたい場合には、CAPSキーを



大文字入力モードでのカーソル形状

画面は新規ファイル作成中のもの。通常は小文字入力モードであるが大文字入力モードに移行するとカーソル上に白い線が現れる。これは、連続して大文字を入力するモードの画面。太い白線が表示されている

続けて2回押せばよい。するとカーソル上の白い線が大きく表示され、以降入力される文字は全て大文字となる。大文字入力モードの解除方法であるが、以下の2通りがある (012)。

- ・「DIARY」キーと「CAPS」キーを同時に押した後、再度「CAPS」キーを一度だけ押す
- ・端末左端にある「SHIFT」キーを2回続けて押す

「+」や「*」といった記号を入力する場合には、記号入力モードに移行する必要がある。モード移行方法は、下記の2通りがある。

- ・「DIARY」キーと「CAPS」キーとを同時に押す
- ・端末左端にある「SHIFT」キーを押す

記号入力モードになると、カーソルの下部に白い線が現れる。この状態で、たとえば「A」の文字を入力すると、「+」が挿入された後、通常モードに復帰する。以下に、各記号とそれを入力するための英字との対応を示す。

記号 : + - * / = \$ % ^ _ ! < > #
英字 : a b c d e f g h i j k l m n

なお、記号は基本的に連続して入力することはないため、モードを固定することはできず、1文字入力後は必ずノーマルモードに戻るようになっている。

AgendaAの機能

次にAgendaAに内蔵されている機能概要を見てみよう。電源スイッチをONにすると、液晶画面に以下のクレジットが一瞬現れる。

Agenda
by Microwriter
30 Nov 1990 4642
s/n 126198

続いて、メインとなるSTART MENU画面に移る。

```
START MENU
to make new file.NEW
to find file/s..FIND
to use diary...DIARY
```

Agendaでは「ファイル作成」「ファイル検索」及び「ダイアリ」の3つの機能が内蔵されている。その他、アクションリストを作成したり、電卓機能を用いることも可能だ。古い端末であるがちゃんと2000年問題にも対応しており、現在の年月日を正確に表示することも可能である。端末キーボードには、基本的な機能を呼び出すための専用キーが設けられている。「START」「NEW」「FIND」「DIARY」「EDIT」「CALC」といったコマンドは、キー一発で起動させることができる。

Agendaの内蔵メモリ容量は32KBであるが、どの程度のメモリを使用しているかは「NOW」キーにより確認することが可能だ。ここでは、バッファメモリに格納されている文字列容量、ファイルの容量、残りメモリ容量がバイト単位で表示される。



CYKEY (サイキー)

Agendaに用いられているMicrowriter Keyboardは、Chord Keyboardsというユニークな方法を採用していたのだが、CYKEY (サイキー) という名称で、このキーボードの現代版が発売されている。開発に携わったのは、Agendaの開発者と思われ、デスクトップPC以外にもPalm版も用意されており、現代でもPDAをコード入力で用いることができる。以下に紹介ページのURLを示す(013)。

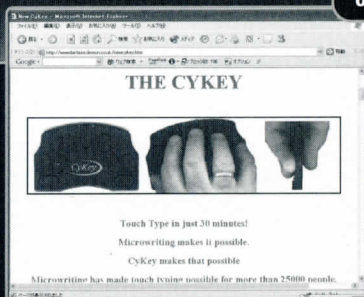
CYKEY紹介ページ

<http://www.bellaire.demon.co.uk/newcykey.htm>

CYKEY自体は125mm×80mm×6.5mmと、非常に小型にできている。リチウムボタン電池を電源とし、6カ月間の動作が可能だそう。現在、PalmとデスクトップPCの2機種に対応しており、インターフェースとしてIrDAを採用している。

デスクトップPCと接続して使用するには、Package Aと呼ばれるセットを購入する。このセットには、CYKEY

013



THE CYKEYの紹介ページ

現代版Microwriter Keyboard、CYKEYの製造元のHP。これがあれば、現代のPDAでChord Keyboardsによる文字入力を実現できる!

本体とPCのUSB端子に接続するIrDAリンクアダプタで構成されており、89.99ポンドとなっている。

一方、Palmに接続するには、Package Cを使用する。Palm本体とはIrDAを用いてダイレクトに接続して使うことが可能であるが、Palmには専用のドライバソフトをインストールする必要がある。

なお、CYKEYにはBluetooth内蔵製品とPocket PC対応製品はない。Web上での説明によると、BluetoothではCYKEYとの通信で使用する電流が多すぎるため、内蔵電池の寿命が短くなってしまふからだそう。また、Pocket PCでは、IrDAによる通信に全二重方式を採用しており、CYKEYのように半二重方式には対応していないといった問題がある。

今までは、The MicrowriterやAgenda端末をシリアル接続でデスクトップPCに接続して使用してきたユーザーも、このCYKEYがあれば、使い慣れたコードキーボードを現代のパソコンで利用できる。また、PDAにも用いることができるため、コードキーボードの最大のメリットである省スペースの恩恵を十分に受けることが可能である。このCYKEYは大変興味深い製品であるため、現物を入手したら改めてご紹介したいと思う。

おわりに

スペースが無くなってきたので、手短かに……。さて、次号はまた「濃い系Psionの世界」に戻り、MC400とWalkaboutをご紹介しようと考えている。同時に、Psion3 Series用に作られた外付けFDDドライブ、Cycloneについてもお伝えしたい。